

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第501号 2023年12月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

「受け止めるといふこと」

永井 陽寛

吉永先生とは、平成30年度大阪府小学校国語教育研究大会にて、指導助言を頂いたことがご縁でした。当時はまだまだ若く尖っていた時期で、想いだけは強く、授業力は…。思い返せばお恥ずかしい限りです。

先日、アメリカに旅行した時に「相手を受け止めようとする心の大切さ」に改めて気づきました。言葉の通じない国でコミュニケーションをとるの難しさを実感したのですが、拙い英語とジェスチャーで、なんとか伝えようとすると、現地の人もなんとか受け止めようとしてくれました。言葉を通じて想いを伝えることを大切に

指導していますが、言葉を紹介することも、通じ合うことができる。日々子どもたちとの関りにも繋がるのでした。

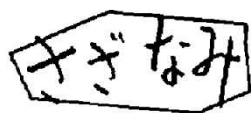
今年度は大阪府の「国語の授業づくりモデル小学校」の指定を受け、国語専科として、学校全体の国語の授業改善に取り組んでいます。これまで、自分自身が培ってきた知識や技術、学習指導要領を読み込み、経験年数も様々な先生方と子どもたちの国語力を育ていくために、試行錯誤しながら研究を進めています。私は担任のクラスは持たず、様々な学年に一元ごとに入り込みで授業をします。授業だけで会う子どもたちも

多く、授業の中でコミュニケーションをとりながら、発言の真意や悩みどころを汲み取って進めていく、楽しさと難しさを感じています。特に一年生は私自身これまで担当したことがない学年で、まだまだ語彙の少ない子どもたちとどうやってやりとりをしながら進めていこうか悩みましたが、「しっかり受け止めよう」と意識したことで、楽しく話しながら授業ができたように思います。

授業における単元構成や発問が「攻め」とするならば、子どもたちの発言や悩みを繋げ広げていくことは「受け」だと考えます。私の中で「攻め」の方は勉強や経験によって少しずつ積み上がってきてはいますが、「受け」の方はまだまだです。幸い今年は、たくさん子どもたちと授業で出会える機会に恵まれているので、しっかりと受け止め、通じ合えるように、自分の幅を広げていきたいです。

最後に、毎回先生方の実践やそこから浮かぶ子どもたちの姿を想像して楽しく読ませていただいています。これからも「国語力は人間力」を胸に、日々授業づくりに励んでいきます。

(大阪府八尾市立八尾小学校教諭)



▼滋賀県の国語教育の推進に力を注ぎ退職をした人達の組織があります。OB・OGが後輩の皆さんの力になりたいという志から生まれたもので、目的を、実践の知恵を次世代に引き継いでいくというものです。令和5年総会に参加しました▼OB・OGの会とはいえ、話題はAIチャットのことなどを含め、時代をリードする勢いがありました。特に、滋賀県総合教育センターの研修指導員の三上昌男さんの「授業の腕をあげる『国語』」は興味深いものでした。校長時代に授業をされた時の記録や若い先生に役立つ俳句や語彙指導等幅広い内容でした。▼現職教員対象の講座で指導の概要を知ることができました▼印象に残ったのは「チャイムが鳴ったら、言葉の切り替えを」というキャッチコピーとその内容。「場面」が変われば、「ことば」も変わるのが社会生活の基本。切り替えの習慣は、先ず、教室で身に付けること。さらに、具体的には次の三つ。

- ①「うん」から「はい」へ。
- ②「だよ」から「です」へ。
- ③「友達ことば」から「学習のことば」へ。子どもへ伝えるだけでなく、教師も習慣にしたい基本であるという思いを強く持ちました。

(吉永幸司)

文学×シンキングツールⅡ?
高木 富也

十一月二十三日(木)の近江の国語実践研究会では、『シンキングツールを用いた文学の授業づくり』と題して、実践提案をさせていただいた。貴重な発表機会をいただいたこと、改めて感謝を述べたい。今回の機関誌では、提案をふりかえり、参会者との質疑応答などを通して見えてきた今後の課題をまとめていきたい。

発表は、①文学×シンキングツールⅡ? ②「モチモチの木」(三年)×ウエビングマップ ③「こんぎつね」(四年)×ウエビングマップ・リーダーチャート ④二つの実践を通じた成果と課題という構成で提案した。文学やシンキングツールの理論的な面や先行研究を示すことができたため、参会者も納得いただけたのではないかとと思う。実践場面では、「モチモチの木」「こんぎつね」という中学年の重要教材を取り扱ったことも、イメージのしやすさに繋がったと思う。板書写真、シンキングツールのワークシート、児童の発話記録、成果物等を視覚的に示しながら、授業の流れを示していた。最後には成果と課題として、文学にシンキングツールを活用することで、児童の主體的な学びを実現することができたと主張したが、短い時間での実践発表であったが、参会者は概ね好感触な雰囲気ではなかったかと感じている。一方、質疑応答や、発表後の交

流等で、課題も見えてきた。シンキングツールの具体的な活用方法、「1」と「2」のアナログのワークシートの組み合わせについては、補足説明をすることで回答することができた。最も課題と感じたのは、「リーダーチャートの読後感の言語が不明瞭である。」という点である。「もやもや」という読後感が、「ごんのか、兵十なのか、読み手なのか、入り混じっていること」とが、児童にとって理解することができたのか?という疑問が残った。本来読後感とは読者側から見た視点である。今回児童は「ごんは、もやもや度が3。兵十は、もやもや度が5。なぜなら…」というように発表しているが、きつ度と児童の中には、「私のもやもや度が5。」という児童もいただろう。文学で数値化を厳密にする必要はないとは考えるが、「誰の立場で考えているのか」という点は明確にした方が良さであろう。そのような課題を、発問指示によって克服するのか、ワークシートの構造等で克服するのか、または別の方法を採用するのか、今後考えていきたい。

【文学×シンキングツールⅡ?】この問いに対する答えは、各学級によって異なるであろう。今回は、「主體的」「学習参加」「読みの変化」という点での成果が大きかった。きつと次の実践では違う感触も生まれるだろう。「授業は生き物」であると捉え、目の前の児童の姿を大切にしながら、今後も研究していきたい。

(東近江市立能登川南小学校)

Yさんの学びの調整
少徳 信

「学びに向かう力」について考えるとき、よく耳にするのが「学びの調整」である。自分自身、なかなか理解できないでいた中、Yさんのとある学ぶ姿がこの「学びの調整」にあたるのではないかと思ったことがあったので、ぜひ紹介したい。

「世界にほこる和紙」「伝統工芸の良さを伝えよう」の書く単元の学習をしていたときのことである。自学級では、彦根・高宮の人ももつと信楽に興味を持ってくれるようリーフレットを作ることとを目的に学習を進めていた。Yさんの姿は、リーフレットの「中」に書く内容を決める時間に見られた。その時間はリーフレットに副題をつけることを通して「中」に書く内容を明確にすることをねらいとしていた。Yさんは、書きたいことはあるものの、副題と内容とがぴたり合わずに苦労していた。具体的には、「秘密の窯の中」という副題のもと、中①に、「ねんどでたぬきが作れる」、中②で「タヌキを作る体験ができる」としていた。そんなとき、ある友達に「①と②で言っていること同じじゃない?」と声をかけた。

Yさん「うん、でもわからへん」友達「副題で『窯の中』って書いてるから、窯のことも書きたいんじゃないん?」

Yさん「ほんまや、たしかにそう。じゃあ、中②を『自分が作ったたぬきが焼ける』にするわ」友達「あ、それやったらめっちゃわかりやすくて良いと思う」時間にしてそれほど長い会話ではなかったはずだが、Yさんにとってもやもやしていたことがすっきり解決した心地がしたのだった。

このYさんの姿から、子どもが学びの調整をするには、以下のことが必要になってくるのではないかと考えた。

- ① 言語活動が具体的であり、試行錯誤する必要性を持っていること。
- ② 学習者が目的意識と見通しを明確に持っていること。

もう少し詳細に分析できればより具体的な項目が挙げられると思うが、Yさんの姿からこれらが必要であると率直に感じた。

この2つのことは言わば当たり前である。ただ、自分自身の今までの授業を振り返ってみると、具体的な言語活動が仕組んでいたのか、学級全員が目的と見通しをもつて学習に向き合っていたのだろうか、その当たり前ができていないことがほとんどだった。その「当たり前」を大切に、これから授業に臨みたい。

(彦根市立高宮小学校)

財産
弓削 裕之

六年「大切にしたい言葉」(光村六年『創造』)の学習で、元プロ野球選手の松井秀喜氏の言葉を引きかけにして、「物やお金よりも、自分にとってはお金より友達が財産だ」と6年間の作文を締めくくった児童がいた。一年生の頃から、誰でも分け隔てなく接することが出来る優しい子だった。作文の題名にもなっていた「財産」という言葉を目にした時、私は、先日の「第九回近江国語実践研究会」のことを思い出した。研究会では、鼎談という経験をさせていただいた。先輩の先生方と三人で、テーマに沿った話をすると、果たして自分に務まるだろうか)と不安が過った。テーマは「言葉への自覚が高まる学習づくり」、とても大きな題材だった。咄嗟の話題に対応できる自信はなかったが、入念に準備をしなればと思っただけ、何に手をつけて良いかわからない。筋の通った確かな実践の足跡が見つからず、十数年間何をしてきたのだろうと途方に暮れた。

時、さざなみ例会のある言葉が思い出された。「子どもの姿が見える原稿にしてください。」

その言葉を聞いてはつととした覚えがあった。自分が書いた原稿には、子どもがいるようではない感じがした。「さざなみ」のバックナンバーを読み返し、先輩方の原稿の書き振りから「子どもの姿が見える原稿」の書き方を学んだ。そこには、ありのままの子どもの姿、ありのままの教師の姿、ありのままの教室の姿があった。こんな風に、出会った子どもたちのことを伝えられるようになりたいと思った。

研究会に向けて、私は「言葉への自覚が高まる学習づくり」のテーマに合った自分の原稿を探した。原稿を読んでいると、これはあのクラスのことだな、これはあの子のことだな、その時々の子どもの姿がよみがえってきた。自分の実践について話す自信はないけれど、子どもたちの姿を紹介できるかもしれない。思い、原稿に付箋紙を貼っていった。それはとても幸せな時間だった。

鼎談では、先輩方のように上手に話すことができずご迷惑をおかけした。より自分の実践に磨きをかけなければと強く感じた。しかし、今回の経験をを通して、「さざなみ国語教室」での十五年の学びの足跡が見つかった気がした。それは紛れもなく出会った子どもたちであり、保護者の方々であり、同僚の先生方であり、同人の先生方であった。

(京都女子大学附属小学校)

「読後感」から始まる学習
谷口 映介

「こんぎつね」(東京書籍四年上)の実践を報告する。本教材は、新美南吉一八歳の時の作品である。昭和五五年度から現在に至るまで、第四学年が使用している教科書の全てに採録されている。せつかくの善意も通じ合わない運命の皮肉(ごんの死)という悲劇的な結末を迎える物語であるがゆえに、人物の会話や行動、出来事等から様々な「問い」が児童から生まれるであろう。話し合う中で、考えのズレも生み出されるであろう。

一、「読後感」からの単元構想

単元の導入にあたって今回大切にしたいのが、「読後感」とそこから生まれる「問い」である。読後感、次の言葉かけで引き出した。ア「こんぎつね」を読むと○○(な)気持ちになりました。イ「こんぎつね」○○(な)話だと思いました。

書く際には、気持ちを表す言葉も提示し、拡充を図った。学習者からは、「悲しい」「もの悲しい」「切ない」「つらい」など、結末からの読後感が数多く出された。一方で、「良い話」であるという感想も一部あった。理由を問うと、中心人物「ごん」の気持ちの変化に引き付けられたからということであった。そこで、単元の中で、読後感が何から来るのか、人物の気

持ちの変化を追うことを目的に、「こんぎつね物語たんてい団」を結成して、解き明かしていくことになった。以後は、多くの「問い」の中から、人物の気持ちの変化を考える上で重要なと考える「問い」を学習者自身がグループや全体で分類・整理した。選択された「問い」については、ここでは割愛するが、「ごん」や「兵十」の気持ちの変化に焦点化し、選び出された「問い」を軸にしながら話し合い(物語たんてい報告会)を重ねた。

二、「読後感」の根拠を話し合う

「物語たんてい報告会」では、気持ちの変化を考えた後に、最初の読後感の根拠を話し合った。一部を抜粋する。【この物語は、「悲しい」(結末(物語)?それとも「よい」(結末(物語)?)(注…二者択一ではなく、両方も可)】

C…ぼくは、悲しいけれど、良い結末だと思います。「火縄じゅうをばたりと、取り落した」ということは、大きな後悔を表しているし、少しは「ごん」の思いが伝わったのではないかと思うからです。

C…でも、「ごん」が持つて来てくれたまでは分かるけれど、なぜなのかは分かっていないと思います。努力が報われていない…(後略) 最後は、冒頭の一文の意味を考えました。今までの学びを振り返りながら話し合う姿が見られた報告会であった。

(竜王町立竜王小学校)

紅葉から言葉を広げる
好光幹雄

晩秋。2年生の国語の授業の一幕です。

「先生、こんな葉っぱ、見つけないよ。」

「うん、いいね。」

「先生、秋になると、もみじがきれいですね。」

「きれいですね。じゃあ、今日は、もみじのお話をしましょうか。」

「はい。」

「みんながもみじって言うてるのは、ふつうこの葉っぱのことですね。」

「はい。」

「でもね、実はもみじというのは、赤くなった葉っぱのことをもみじと言います。漢字で書くと紅葉と書きます。紅は赤いという意味ですよ。」

「え、そうなんや。」

「みんなが言うてるもみじには、実は木の名前があって、楓(かえで)の葉っぱです。ですから、楓の葉っぱが赤くなると楓紅葉(かえでもみじ)と言います。」

「えー、知らなかった。」

「では、他にも赤くなる葉っぱがあるでしょ。この葉っぱは何の葉っぱか知っていますか?春になると、咲く花だよ。」

「さくら?」

「はい、桜です。ですから、秋になって桜の葉っぱが赤くなると桜紅葉(さくらもみじ)と言います。」

「えー、そうなんや。」

「そうすると、赤くなる葉っぱ、いっぱいあるでしょ。この実、何ですか?」

「柿です。」

「ほら、これ、先生がとってきた柿の葉っぱです。きれいでしょ。」

「あ、ほんまや、赤くなってる。」

「すると、柿の葉っぱが赤くなっているの、柿紅葉(かきもみじ)と言います。」

「先生、いちようの葉っぱは黄色くなりませんか。」

「そうですね。銀杏(いちよう)の葉っぱは黄色くなりますね。だから漢字では黄葉と書きます。そして黄葉と書いて、これも、もみじと読みます。草の葉っぱも赤くなりますね。だから草紅葉(くさもみじ)、つたも赤くなるから篇紅葉(つたもみじ)、そして山全体が赤くなると山紅葉(やまもみじ)とか紅葉山(もみじやま)、それからきれいな織物に喩えて山の錦(やまのにしき)と言います。」

「え、にしきって、京阪電車の駅の名前のあの錦ですか?」

「はい、そうですね。あの漢字の錦ですよ。」

「もみじって、いろんな言い方があるんですね。」

「はい、またお家の人といろんな紅葉を見に行ってくださいね。」

「どうやって、一つの言葉「紅葉」を中心に言葉を広げ、イメージを広げ、感性を広げました。」

話題は食べ物などにも広がり、秋刀魚も人気の言葉となりました。

☆いろいろなもみじのはっぱ
きれいだな 心粧
☆もうあきだ みんなでたべるおにぎりを 陽斗

☆たくさんの桜(さくら)紅葉(もみじ)が おちて いる まどか

☆かきもみじ オレンジ色で きれいだな 優奈

☆コスモスさん くりもおちばも あたたかい 隼翔

☆友だちと 秋刀魚一しよに 食べたいな 揺明

☆秋の木は はの色どんどん わってく 篤弥

☆かえでが 半年たつて もえて いる 歩

☆紅葉踏む石山寺の石畳 幹雄

私は国語の授業とは、「言葉について普段意識しないことを意識化させること」でもあると思っており、葉っぱによって名前が異なる紅葉が存在するという事を知ることが、実はものごとを見る視点を多様に持つということでもあるのです。

それは、人生を生きる上でも多様な視点と柔軟な発想を持つことを可能にするものでもあると思うのです。

「紅葉」という一つの言葉から、子どもたちは言葉の大海へと冒険に出て、新たな経験を積むことになるのです。私は、その水先案内の一人に過ぎません。

編集後記

▼11月例会(五〇〇回)は「第9回 近江の国語実践研究会」と共催で行いました。(会場は明日都浜大津)研究主題「言葉への自覚が高まる学習づくりの工夫」を深める発表①叙述をもとに考えを深める発表②「ごんぎつね」(日栄小)実践協力者 井上 混斗さん(日栄小)実践協力者 北川 雅士さん(河瀬小)。教材の全文視写を取り入れることにより、学習意欲が高まり、深い読みを交流する授業になったと授業実践記録が魅力でした。②実践提案シンポジウム「モチモチの木」。「ごんぎつね」高木 富也さん(能登川南小)実践協力者 海東 貴利さん(安曇小学校)思考力・表現力を育てる研究の視点と教材研究の成果を生かした授業づくりを中心にした多彩で充実した提案でした。▼鼎談は蜂屋 正雄さん(北野小)はテーマに関わる概要と実践、谷口 映介さん(竜王小)は実践理論もとに提案し、弓削 裕之さん(京都女子大学附属小)は、子どもの側から授業の面から「言葉への自覚が高まる学習指導」についてを発表しました。▼総括「研究会に学ぶ」は吉永が受け持ちました。

まず、成果として、実践提案および鼎談の内容について、学習者視点からみる内容の新鮮さが見えてくる点から、次に、国語教室に端末タブレットが学習道具として活用や基礎的な汎用的読解力(2020)等の実践の課題をかかえる国語科教室の背景には「国語力は人間力を生かすことの意味について提案しました。」

▼巻頭には、永井陽寛先生から、玉稿を頂きました。感謝。(吉永幸司)

「紅葉」という一つの言葉から、子どもたちは言葉の大海へと冒険に出て、新たな経験を積むことになるのです。私は、その水先案内の一人に過ぎません。